

漢字で教える意味とは何か

小堀(桂):きょうのお話の方式で感孚教育をやっている幼稚園の現場では、具体的にどういう教授法をとっていらっしゃるのでしょうか。

石井:幼稚園の漢字教育には、漢字で教える立場と漢字を教える立場の二つがありますが、私の方からは、最初は漢字を教えることは考えるな、漢字で教えていければいいのだと指導しております。たとえば、我々は家庭で子どもに言葉の教育をしているかという、意識的にはしておりませんね。「これが眼鏡というものだ」とか「これは時計というものだ」というふうには教育しておりません。実際には、「だめじゃないか、時計をいたずらしては」とか「ちょっと眼鏡を取っておくれ」とか言って、時計や眼鏡という言葉を知らない子どもに対して、すでにこの言葉を知っているものとして使っていることが多いと思います。そして、子どもはそういう生活の中で、「あ、これは眼鏡というものか」、「これが時計というものか」というふうにして言葉を覚えていくわけです。

それと同じように、漢字も意識して教える必要はないと思うの

です。幼児の場合は生活指導が非常に重要ですが、たとえば「手を洗う」ことを教える場合、いままでの幼稚園教育では、こういう場合には手を洗いましょうね」と幼児の耳にしか訴えないわけです。ところが、耳で受け取るくらい難しいことはありません。口で言う言葉は次から次とすべて瞬間的に消えてしまいますから、幼児にとっては、かりに十回聞いたってなかなか受け取れるものではありません。ところが、黒板に「手を洗う」という字を書きますと、子どもたちは「おや、何を書いたのだろう」というわけで、いたずらしておった子どもも黒板の方を見ます。こういうときには手を洗うんだよ」と、その言葉を使う度に、その字を指しながら教えるのです。子どもの目と耳が教師の方へ向かえば、その習得率は非常に高いものになります。

実は、アメリカのゼネラル・モーターズでしたが、学者に調査させたものが、日本生産性本部の報告書に載っていました。耳から吸収した知識は三日後には10パーセント、目からのものは20パーセント、耳と目の両方から吸収したものは65パーセントになるという数字です。この報告は、私は偶然目にしたのですけれども、やはり視覚言語と聴覚言語の両面から子どもに

働きかけなければいけないのだという思いを強くしました。子どもというものは、とりわけ目をたえず遊ばせているものですから、そのような子どもにただ話しかけたって受け入れられるものではありません。それで黒板に漢字で書くことを勧めるわけです。

これをやりましてから、子どもたちの受け入れ方が全然違ってきたそうです。たとえば「手を洗う」学習一つを取り上げても、先の報告が真実なら、今までなら10パーセントしか吸収されない学習が65パーセント吸収される学習になるわけですから、受け入れ方が違ってきていることがはっきりとわかります。ですから、漢字教育をしている幼稚園の子どもと、そうでない幼稚園の子どもとでは、しつけがまったく違ってきているという報告がたくさん私のところに寄せられています。

たとえばこういうこともあります。動物園に遠足に行きます。翌日大抵その絵を画かせますが、そのとき、「昨日動物園に行ってお楽しかったねえ。何がいちばん面白かった」と子どもに尋ねます。そうすると「ぼくは象が面白かった」とか、「私は猿が面白かった」とか、さまざまなことを言います。そのときに、「あ、象さんがいたね」と言いながら「象」という字を黒板に書き、「そう、猿

さんもいたね」と言って「猿」という字を書く。それから、「さあ、それでは昨日の面白かったことを絵にしましょうね」と言って画かせますと、ただ会話だけでやっていたときと、話題を漢字で書くようになってからとではその結果が違うというのです。

象という言葉と一緒に「象」が書かれ、猿という言葉と一緒に「猿」が書かれますと、子どもたちはたちまちその字を覚えてしまいます。ですから、黒板を見さえすれば、「あ、象がいたっけ、猿がいたっけ、熊もいたぞ」と、昨日の経験が呼びさまされ、考え考え画くようになるわけです。漢字教育をやるようになってから、幼児の画く絵の内容が違ってきたそうです。

話をもとに戻しますと、そういうわけで、幼稚園では特に漢字を教えるということを意識しないように勧めています。意識しない方がむしろ効果が上がるし、それに使っていれば子どもの方は自然にこれを覚えてしまうからです。そういうやり方をしています。